日 本 科 学 者 会 議

福岡支部ニュース

2009 年 6 月 25 日発行 No.198

● 日本科学者会議事務局
〒113–0034 東京都文京区湯島 1–9–15
Tel (03)3812–1472
● 福岡支部事務局
事務局長　三好永作
〒816-8580 福岡県春日市春日公園 6 丁目 1 番地
九州大学大学院総合理工学研究院融合創造理工学部門
Tel：092–583–8839, FAX：092–583–7677
Email：miyoshi@asem.kyushu-u.ac.jp
郵便振替 01790-1-5576

目次

1　福岡支部 第 39 回定期大会の報告 ・・・・・・・・・ 1
2　講演会「益川敏英博士のノーベル賞受賞を記念して」の報告 ・・・・・・ 8
3　福岡環境研究会のお知らせ ・・・・・・・・・ 11
4　「日本の科学者」読書会・夏期合宿のお知らせ ・・・・・・・・・ 12
5　エネルギー研究会のお知らせ ・・・・・・・・・ 12
6　次期大会の日程について ・・・・・・・・・ 12

1　日本科学者会議 福岡支部 第 39 回定期大会

2009 年 5 月 10 日 (日) 14〜15 時
久留米大学福岡サテライト (アクロス福岡東オフィス５Ｆ)

1.1　2008 年度活動報告

1.1.1　福岡支部活動記録

5/11　「平和と憲法について考える」シンポジウム, 「ファスレーン基地での非暴力直接行動」三好永作, 「憲法平和主義の岐路を考える」出水薫 @ 久留米大学福岡サテライト
5/19　「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
5/26　九州沖縄シンポジウム実行委員会 @ 久留米大学福岡サテライト
5/31　エネルギー研究会 (第 19 回) @ びおとーぷ
6/4　幹事会 (第 1 回) @ 久留米大学福岡サテライト
6/9　「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
6/25　支部ニュース発行 No.194
6/28　エネルギー研究会 (第 20 回) @ びおとーぷ
6/29　福岡環境研究会「目から鱗の長生き免疫学」講師：浦川豊彦 @ 久留米大学　福岡サテライト
7/7　「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
7/26　エネルギー研究会 (第 21 回) @ びおとーぷ
7/28　第 2 回九州沖縄シンポジウム実行委員会 @ 九大筑紫キャンパス

8/1	原水爆禁止 2008 年世界大会・科学者集会「核兵器廃絶、恒久平和への思いを茨城・つくばから」に 1 名参加
8/22〜23	「日本の科学者」読書会夏合宿 @ 湧水千石の郷
8/23	エネルギー研究会 (第 22 回) @ びおとーぷ
9/8	「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
9/8	幹事会 (第 2 回), 九州沖縄シンポ実行委員会 (第 3 回) @ 久留米大学福岡サテライト
9/27	エネルギー研究会 (第 23 回) @ びおとーぷ
9/27	福岡環境研究会「最近の都市災害の傾向と回避のために」講師：多賀直恒 @ 久留米大学福岡サテライト
10/4〜5	第 26 回九州沖縄シンポジウム,「環境・平和・学問」に関する連続講演会―21 世紀の九州沖縄を展望する― @ 九州大学六本松キャンパス５１０号教室
10/13	「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
10/18	シンポジウム「九州の水環境を考える」@ 久留米市立中央図書館・視聴覚室 (久留米分会・筑後川水問題研究会と共催)
10/21	支部ニュース発行 No.195
10/25	エネルギー研究会 (第 24 回) @ びおとーぷ
10/25	福岡環境研究会「：有明海における地形変化による環境変化と調整池の排水構造からくる環境異変」講師：石田宏一 @ 久留米大学福岡サテライト
11/10	「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
11/15	福岡環境研究会「これまでの環境教育これからの環境教育」講師：藤本登 @ 久留米大学福岡サテライト
11/22〜24	第 17 回総合学術研究集会 @ 名古屋大学 (参加 2 名、報告 1 件)
12/8	「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
12/8	幹事会 (第 3 回) @ 久留米大学福岡サテライト
12/20	エネルギー研究会 (第 25 回) @ びおとーぷ
1/10	福岡環境研究会「九州における自然エネルギー資源と利用可能性について」講師：青野雄太 @ アクロス福岡久留米大学サテライト
1/12	「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
1/21	支部ニュース発行 No.196
1/31	エネルギー研究会 (第 26 回) @ びおとーぷ
2/9	「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
2/9	幹事会 (第 4 回) @ アクロス久留米大学サテライト
2/28	エネルギー研究会 (第 27 回) @ びおとーぷ
3/9	「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
3/18	支部ニュース発行 No.197
3/20	福岡環境研究会「スローライフ大国キューバの有機農業運動」講師：酒井嘉子 @ 久留米大学サテライト
4/13	「日本の科学者」読書会 @ びおとーぷ
4/18	エネルギー研究会 (第 28 回) @ びおとーぷ
その他	「日本の科学者／科学者つうしん」2009 年 5 月号

(注) びおとーぷ：福岡 NPO 共同事務所「びおとーぷ」

1.1.2 「日本の科学者」読書会

発足以来の経過については、「日本の科学者」vol. 44 (2009) No. 5, p.55 に藤井幹事 (残念ながら、今期限りで勇退) の報告がある。

この一年間は順調に毎月開催した。合宿については支部ニュース (No. 195) で報告済みである。昨年の報告で提起した評論として残すということは実現できなかった (但し、2009, No. 2 の「知的所有

権」については前述の藤井幹事の報告の中に秀れた評論がある)。引き続き、追求したい (個人的には読後感想文でよいと思う)。

1.1.3　福岡環境研究会

６月例会
テーマ：目から鱗の長生き免疫学
講　師：浦川豊彦（医学博士、元 オックスフォード大学・ロンドン大学上級研究員）
　　日ポリ化工（株）温熱療法研究室主任研究員
日　時：6 月 29 日（日曜）15 時～17 時
場　所：久留米大学福岡サテライト（アクロス福岡・東オフィス５階）

９月例会
テーマ：「最近の都市災害の傾向と回避のために」
講　師：多賀直恒（山口福祉文化大学教授・元福岡大学教授）
日　時：９月２７日（土曜日）午後 16:30～18:30
場　所：久留米大学福岡サテライト

１０月例会
テーマ：有明海における地形変化による環境変化と調整池の排水構造からくる環境異変
講　師：石田宏一
日　時：１０月２５日（土曜日）午後 16:00～18:00
場　所：久留米大学福岡サテライト（天神・アクロス福岡東オフィス５Ｆ）

１１月例会
テーマ：これまでの環境教育これからの環境教育
講　師：藤本登（長崎大学准教授）
日　時：１１月１５日（土曜日）午後 16:00～18:00
場　所：久留米大学福岡サテライト（天神・アクロス福岡東オフィス５Ｆ）
１月例会
テーマ：九州における自然エネルギー資源と利用可能性について
講師：青野雄太（九大工学部・准助教）
日時：０９年1月１０（土曜日）１６時～
会場：アクロス福岡久留米大学サテライト

３月例会
演題：「スローライフ大国キューバの有機農業運動」
講師：酒井嘉子（九大名誉教授）
日時3月２０日（金曜）１６時～
場所： アクロス福岡久留米大学サテライト

1.1.4　エネルギー研究会

福岡支部エネルギー研究会は「食料とエネルギー」をテーマに有志で勉強会を始めた。原則として月 1 回第 3 土曜日の 14：00～17：00 に開催している。今年度は 10 回開催した。参加者は個人会員を中心に 3～8 名である。オイルピークや農業におけるエネルギー利用を中心に勉強した。また、それぞれの参加者から最近のニュースや文献などの紹介を随時行なっている。今年は当初目標としていた総学での報告を行なった。また、参加者と有意義な交流ができた。新しい参加者もあり、この研究会を地道に継続していきたい。課題としては、研究会としての目標と参加者それぞれの研究テーマを明確にすることが挙げられる。

1.1.5　久留米分会

筑後川水問題研究会の 30 周年記念シンポに共催ということで分会例会と兼ねました。

九州の水環境を考える

日時：１０月１８日（土曜）
久留米市立中央図書館・視聴覚室
第一部「私たちの川を次世代に残したい」
宮本博司（元国土交通省・本省河川局防災課長、淀川流域委員会委員長）

第二部「九州各地の報告」
川辺川（板井優弁護士）
有明海報告（馬奈木昭雄弁護団長）
城原川ダムについて（佐藤悦子氏）
小石原川ダム（河内俊英氏）
筑後川上流の水量（財津忠幸氏）

1.1.6　北九州分会

担当幹事が多忙のため、分会としての活動は行えなかった。

1.1.7　九大理農班

特に活動を行なっていない。

1.1.8　九大文系班

特に活動を行なっていない。

1.1.9　九大六本松班

特に活動を行なっていない。

1.1.10　九大工学部班

特に活動を行なっていない。

1.1.11　その他の活動

「環境・平和・学問」に関する連続講演会と題して、九州沖縄地区シンポジウムを主催した。特に、シンポジウムの二日後にノーベル賞を受賞することになる益川氏の講演が担当幹事の努力によって実現できた。参加者は多くはなかったものの、その中から新会員の入会があるなど、充実した講演会であったと思う。

機関誌「日本の科学者」の「科学者つうしん」へ、「日本の科学者」読書会について原稿執筆依頼があった。機関誌の読書会を開催することによって、支部活動の活性化に期待できるとのことで、継続のコツなどの報告を依頼された。

活動方針に「平和・憲法に関するシンポジウムを開催する」ことを挙げていたが、単独では開催できなかった。しかし、これに代わるものとして九州沖縄地区シンポで平和に関するテーマの講演会を開催した。

1.2　2009 年度活動方針

福岡支部では会員の減少傾向が続いている。また、国立大学の法人化などによって多くの会員が多忙化している。しかし、その中で環境研究会や「日本の科学者」読書会、エネルギー研究会などの活動が継続的に行なわれていることは評価できる。

全国組織では 2015 年の創立 50 周年に向けて、21 世紀社会のあり方と日本国憲法の役割についての研究活動を軸にした運動を提起している。貧困・格差問題や金融恐慌など社会不安が増大し、科学者会議の存在意義が高まる中、現在の活動を広め、新たな会員を獲得し、会の活動を強化する取組みを進めよう。

(1) 平和・憲法に関するシンポジウムを開催する。
ここ数年間の世論調査で 9 条改憲反対が過半数を占めるようになってきている。その一方で、食糧やエネルギー資源の獲得競争など憲法の平和主義を生かすべき場面は多く存在する。今年度もシンポジウムを開催し、憲法を学ぶ取組みを行なう。

(2) 新会員獲得活動を行なう。
手紙、電子メールなどを活用して、大学関係者だけでなく、高校教員や市民運動にかかわる人などにも入会を勧める。また、研究会や班活動を活性化し、他団体との交流を深め会員を獲得する。

(3) 九州沖縄シンポに参加する。
例年行なわれている九州・沖縄シンポジウムに今年も参加し、他支部との交流を行なう。

(4) 原水禁科学者集会など原水爆禁止運動に協力する。

(5) 教育・大学問題を積極的に取り上げる。

その他として、九州大学の移転に伴い、班を再編する。九大の班は、箱崎班、筑紫班、伊都班、大橋班とする。

1.3 新役員

事務局長	三好永作 (九大筑紫班)
常任幹事	鈴木右文 (九大伊都班)
	中野豊 (九大箱崎班)
	青野雄太 (九大伊都班)
幹事	岡本良治 (北九州分会)
	河内俊英 (久留米分会)
	岸本誠 (個人会員)
会計監査	佐藤宣子 (九大箱崎班)
全国参与	杉浦實 (個人会員)
	森茂康 (個人会員)
全国幹事	三好永作 (事務局長)
びおとーぷ運営委員	青野雄太 (九大伊都班)

2　講演会「益川敏英博士のノーベル賞受賞を記念して」の報告

「益川敏英博士の学問・方法論・社会的活動から何を学ぶか」要旨

岡本良治（九工大・工学研究院・基礎科学研究系）

I. 2008 年度ノーベル物理学賞の受賞理由

「対称性とその自発的破れ」という仕組みが基本的な力の創成など、自然界の多様性を生むこと。物質粒子の基本的な構成としてクォーク・レプトン組の 3 世代構造、クォークが単独では取り出せないこと。小林・益川理論の実験的証明が日米の巨大装置を用いて独立に行われたこと。

II. 現代素粒子論の「言葉・文法」としての量子場理論とその進化の系譜

1. 日常の言葉と物理用語の意味の違い：物理学における基本的言語は数学である。真意をゆがめることなく、普通の言葉（自然言語）に翻訳できる（される）かどうか！　複雑骨折的な「理解」に

要注意！！ミクロの世界、超ミクロの世界は直接見ることも触ることもできない。知力によってのみ認識しうる、機器で検出される実在（量子的実在）への頭の切り替えが必要である。通常、人間個人は自然言語を用いて思考・判断する。例えば、「粒子」という自然言語は、多分 17 世紀起源の元来の意味と限現代物理学における概念は質的に異なっているが、教科書などで説明する際には、同じ「粒子」という表現を使わざるを得ない。そのため、批判的分析を行う場合には、簡単に代替用語を見出せないくらいの困難に陥ることもある。

2. 古代から 19 世紀までの物質観：あえて、要約すれば、ニュートンの（運動方程式＋重力）＋マックスウエル方程式＝古典物理学のすべてであり、粒子（原子）と場の 2 元論にとどまっていたと言える。
3. 現代の物質観と基本的法則の到達点：マクロな物質は、莫大な個数（6 x 10 の 23 乗以上）の原子・分子から構成される。分子は複数の分子からなる。原子は電子と原子核からなる。原子核は陽子、中性子からなる。陽子、中性子は 3 個のクォークから構成される。物質の基本的構成要素としてのクォーク・レプトンは 3 世代 6 種類。
4. 量子場理論（場の量子論）とその進化

ミクロな世界の認識である量子力学とその上部理論としての量子場理論においては、真空観・物質・力 (相互作用) 観、それらが古典的な原子論、単純な還元主義とは質的に異なること。

量子場とは（場の量子力学と特殊相対論）に厳密に規定された存在 (実在）である。

(1) 量子場は本来、非局在的（non-localized) で、「波動性」をもち、その量子化された励起（振動）は離散的で「粒子性」に対応。
(2) 同種粒子は相互に区別できない：あらゆる電子はコピーである。
(3) 同種粒子は次の 2 種類に分類される。物質構成要素としてフェルミ粒子（ファルミオン）; クォーク・レプトン。 相互作用を媒介するボーズ粒子（ボゾン）; 光子、グルオン（膠着子)、弱ボソン
(4) フェルミ粒子間の相互作用はボーズ粒子の交換により媒介される。
(5) 真空は多体系の基底状態 (エネルギー最低状態）である。
(6) 粒子には（電荷が逆で、他の性質は同じ）反粒子が伴う。粒子と反粒子が結合する場合には、その質量エネルギーの 2 倍のエネルギーが放出される。また、その質量エネルギーの 2 倍のエネルギーが投入されれば、粒子・反粒子の対が創成される。
(7) 極短時間内では、粒子・反粒子の生成・消滅により、[量子的] 真空は揺らいでいる。

すべてのミクロな物質の基本的存在様式が量子場であると考えられる根拠

1) 近接作用の原理：　物理的な作用はある物質から、その近傍の空間に伝わり、さらに、またその近傍へ・・・というふうに、光速を越えない速さで伝わる。
2) すべてのミクロの粒子には反粒子があること。

なぜ量子場理論が必要か？

1) (粒子の）量子力学は、電子など「粒子」の「波動」性を理解することはできたが、光 (電磁場) など場の「粒子」的性質は理解できない。
2) 通常は “ 天下り的に ” 認められているが、電子などミクロの「粒子」は個性を全くもたないことが量子場理論では明確に導かれる。

量子場理論は建設が始まった 1928 年から多くの理論的困難が指摘されたが、技術的、概念的整備によよって長足の進化を遂げた。特に、1950 年代から発展したゲージ原理、その中核としての局所ゲージ対称性が「地方自治の原理」と類似し、「自治体」間で整合的な「情報伝達」をするのがゲージ粒子であること。

P.R. ウォレス「量子論にパラドックスはない」の中には次のような印象的な文章がある：
「われわれが体験している “ 日常の世界 ” は、透き通ったように簡単ではないけれども、われわれが今

描いたほど複雑ではない。 残るものは、われわれの認識の世界の拡大を作り出す技術的能力と、われわれの景観から隠されている実在の縁を心に描くわれわれの想像力に制約されながら姿を現してくる、一層深い階層である。」

III. 研究方法論・自然観・科学者の社会的責任論：

1960 年代における量子場理論への評価がその後の研究方向の分水嶺であったこと。

「形の論理」と「物の論理」との関係。数学軽視派と数学的整合性（優美さ）重視派。

益川博士の言葉「過去の知識・経験・をふまえて、未来を予測しながら研究を始めるわけです。それをできるだけ客観的にやろうというのが研究方法論だと思います。だから、過去にあった出来事を法則化し、できるならばもっと抽象化してく。抽象化した知識は法則だと思います。抽象化した言葉で定式化する。そういうことが民主主義の問題にしても、研究方法論にしても基本と思います。」

IV. 講演者自身の感想と講演後に学んだこと

初め軽い気持ちで講演を引き受けた。その後、場の理論のことを物理関係以外の人に紹介するために種々の文献の説明の仕方を学ぶ必要があることに気づいた。無論、自分の知的空白を知るはめになった。そのうち、量子場理論の理論的かつ認識論的な深さに圧倒され、一時期は頭が真っ白になるような状態を体験した。物理学関係の教科書は数式や数値にあふれているが、今回紹介したような形での解説は非常に少ないと思う。

また講演後に、講演を聞いた同僚から「ミクロの同じ種類の粒子には自己同一性がない (self-identity) がない」という表現に疑問が出されたことを契機に、鈴木会員との意見交換で、identical は「同じ」という意味で、 identify は他とは異なること同定するなど奇妙な関係であることを知る。

また、量子力学、量子場理論における粒子性概念はどのように位置づけられるか、相当に苦しんだが、亀淵迪, 表實「量子力学特論」（朝倉、2004 年）という本がその題名とは逆に、量子場一元論を主張し、粒子性概念の批判的分析が主題の 1 つになっていることを知り、P.R. ウォレス「量子論にパラドックスはない」という本を再読して同じ主張であることを確認して、安堵した。また特殊相対論の、特に、光速を超えて物理情報は伝わらないという微視的因果律が、素朴な原子論の成立を阻み、量子場理論の基本的な理論構成に重要な役割を果たしていることを知るなど、改めて自らの無知を知ることとなった。また,A.Zee ,Quantum Field Theory in a nutshell,(Princeton Univ. Press,2003) の結びの言葉という最終章には次のような文章が記されていることを知り、量子場理論に自分が感じた思いをうらづけられたような感じがした。The triumph of the quantum field theory was veritably a victory parade that made the spectator gasp with awe and laugh with joy. String theory is beautiful and marvelous, but until it is verified, quantum field theory remains the true theory of everything. All of physics can now be said to be derivable from field theory.

今回の講演は自分の精神生活の上では、貴重でかつ稀有な体験となった。提案者の鈴木幹事を含む幹事会諸氏とまとまりのない講演を清聴していただいた方々に深く感謝する。

講演ファイルは pdf 化していますので、okamoto@mns.kyutech.ac.jp に連絡していただけば、送信します。

(講演者にとって、勉強になったり、刺激的であり、入手可能な文献)

- 吉田伸夫「光の場、電子の海ー量子場理論への道ー」、新潮社、2008 年。
- ファインマン「光と物質のふしぎな理論ー私の量子電磁力学」、岩波書店、1987 年。
- P.R. ウォレス「量子論にパラドックスはない」、シュプリンガー・フェアラーク東京、1989 年。17 章、19 章など。
- H.R. パージェル,「物質の究極」,　地人書館、1984 年。

感想

昨年１０月４～５日に日本科学者会議 (JSA) 主催の九州沖縄シンポジウムで益川敏英先生をお招きして，科学と教育をめぐる現状と課題についての討論を行った．その中で「６クオークモデル」の誕生に至る話の詳細を聞かせて頂き，その２日後に南部・小林・益川のノーベル賞受賞のニュースが舞い込んで身近にノーベル賞を体感でき大変印象的であった．今回は，５月１０日に JSA 福岡支部の定期大会の後に，益川先生のノーベル賞受賞を記念して，「益川敏英博士の学問・方法論・社会的活動から何を学ぶか」というタイトルで，研究分野が比較的近い岡本良治氏 (九工大) に熱く講演をして頂いた．２９名の参加があり，受賞理由を学問的深みの中で理解し，さらに，益川先生の方法論から何を学ぶかを探る意欲的な講演となった．

まず，氏は受賞理由をノーベル賞委員会の発表を基にしながら「自発的対称性の破れ」,「CP 対称性の破れ」という点を説明された．次に，学問的背景を歴史的にレビューされ，古典物理学から量子物理学へ，量子場理論とその進化，ゲージ理論に至るまでを詳しく，しかも一般の人にも解らせようという意気込みを持って解説された．スーパーで買ってきた 240 円の布を赤いボールに被せてひらひら動かし，これが電子の実態であるという説明には妙に説得力があった．また，「今日の最も一般的な物質像は量子化された場の概念」であり，電子はすべてコピーであり identity を持たないこと (注１) は，量子場理論によってはじめて説明されるという解説には，天啓を得た思いであった．湯川博士が数学を軽視されたのに対して，益川先生は「自然は豊かで数学的に可能な論理が自然の論理としてどこかに必ず実現している」と数学的整合性の重要性を日頃から強調されていたことを紹介された．また，「過去にあった出来事を法則化し，できるならば抽象化していく」,「抽象化した言葉で定式化することが民主主義の問題にしても研究方法論にしても基本」であると抽象化の重要性を強調されていたことも紹介された．

科学者運動や社会的運動のあり方についても「科学的考察に基づく予見性をもつべきこと」,「ファシズムとの戦いなど過去の歴史的体験を法則化抽象化して深くとらえ，同じ間違いをしないようにすべき」という益川先生の九州沖縄シンポジウムでの発言を紹介された．たくさんの参考文献を読みこなし，100 枚にもおよぶスライドからなるパワーポイント書類を準備され，熱演された岡本氏にお礼の気持ちと共に熱い拍手を送りたい．

(注１) 電子などが identity を持たないということの意味は，２つの電子が区別できないということである．例えば，２つの部屋 A, B(軌道という) があり，各部屋には１個の電子しか入れないとして，電子が区別できるのであれば，１番目の電子が部屋 A に入り２番目の電子が部屋 B に入る状態と１番目の電子が部屋 B に入り２番目の電子が部屋 A に入る状態の２通りの状態が取り得る筈であるが，実験で確かめて見ると，この場合，１つの状態しか存在しないのである．これは電子が区別できないということを意味し，これを「電子は identity を持たない」と表現する．

(三好永作)

3　福岡環境研究会のお知らせ

７月例会

講演題目：「ホームレス支援の日米比較」
講　　師：斎藤輝二 (東和大学教授)
日　　時：7 月 4 日 (土)16 時～6 時半
場　　所：久留米大学福岡サテライト (アクロス福岡・東オフィス５階)
お問合せ先：福岡環境研究会事務局
　　河内俊英　0942-35-3311(久留米大学医学部)
　　近藤加代子

参加費：１００円
アメリカのホームレス支援の国際比較のレポート作成に参加しました。ホームレス支援は国際比較の話もしたいと思います。事前申込不要です。当日会場へお越し下さい。

4　「日本の科学者」読書会・夏期合宿のお知らせ

日時：2009 年 7 月 15 日 (水)12:00〜16 日 (木)12:00
場所：国民休暇村志賀島 (092-603-6631)
今年のテーマは戦争および教育・研究です．戦争は憲法 9 条の関連が，教育・研究は大学教育が主に議論されると思います．まだ宿泊の余裕がありますので，現役の方の参加を切に希望します．連絡をお待ちします.

藤井　哲 (Tel:092-591-7384, Email:t.fujii@mms.bbiq.jp)

5　エネルギー研究会のお知らせ

7 月 25 日 (土)14〜17 時、NPO 共同事務所「びおとーぷ」で行ないます。「環境エネルギー革命」(金子勝/アンドリュー・デウィット共著)、「自動車にいくらかかっているか」(上岡直見著) を読みながら議論する予定です。関心ある方の参加をお待ちしております。

青野雄太 (Tel:092-802-3281, Email:aono@mech.kyushu-u.ac.jp)

6　次期大会の日程について

幹事会では次期大会の日程を 2010 年 5 月 9 日 (日) に仮決定しました。また、会場は福岡市内を予定しております。皆様、万障お繰り合わせの上、ご出席下さい。